

—イザヤ66章・18-21、ヘブライ12章・5-7、11-13ルカ12章・22-30—

(そのとき)イエスは町や村を巡って教えながら、エルサレムへ向かって進んでおられた。すると、「主よ、救われる者は少ないのでしょうか」と言う人がいた。イエスは一同に言われた。「狭い戸口から入るように努めなさい。言っておくが、入ろうとしても入れない人が多いのだ。家の主人が立ち上がって、戸を閉めてしまってからでは、あなたがたが外に立って戸をたたき、『御主人様、開けてください』と言っても、『お前たちがどこの者か知らない』という答えが返ってくるだけである。(中略)そして人々は、東から西から、また南から北から来て、神の国で宴会の席に着く。そこでは、後の人で先になる者があり、先の人で後になる者もある。」 —ルカ13章—

## 神の国の宴

神が世に「しるし(・・・)」を与える時、それが神からだだと、気づく人と、気づかない人がいます。それはその人の心の状態によるのかもしれないですが、日頃、真理なるものにあこがれ、それを求めている人には感じ易く、自分を世界の中心に置いて生きている人には響かないようです。

しかし、神ご自身が人の心に「しるし」を与えるとき、目覚めて人は、神に向かうようになるのです。

こうして、かつて神がイスラエルの民を選んだのは、彼らを通して世界にご自身を現す使命を与えるためでした。

しかし、のど元過ぎれば・・・のごとく、赤ちゃんの時、母親がすべてだった人類は、成長と共に少し力がついてくるや、一人で大きくなったような顔して、母親を軽んじ

るように、民は自分の力に頼って神を必要としなくなり、結果、世界に散らされていったのです。

人類の不始末にも拘らず、我が子を見捨てられない親である神は、終わりの時には、神自ら、散らされていた我が子たちを、彼らの使命に預かるべき筈であった異邦の民とともに、彼らの心にしるしを与えて集められる、とイザヤは預言の最終章で告げています。

その「しるし」とは、おとめが身ごもってインマヌエルと呼ばれる男の子を産む”ことであり、やがてその子が目指す「復活」への道を示す、十字架に昇る事でした。

「十字架」とは、拘束された体(欲望に向かう肉を捨てて、自由な「心」で父なる神に向かう道です。

この道は、人の欲望を掻き立てるような安易な「広い道」ではなく、ひたすら神を信頼して、身をかがめ、くぐり抜けていかなければ通れないかつての荒れ野の試練を思わせる「狭い道」だと、主は教えておられるのです。

この道をくぐり抜けたあなたを、父なる神が待っておられます。すべて神が給仕してください。「神の国のうたげ」を用意して!」



2022年8月21日  
主任司祭 昌川信雄